

ヨハン・ホイジンガ研究の動向 (1)

杉 浦 恭

Takashi SUGIURA

(健康科学選修)

はじめに

オランダの歴史家ヨハン・ホイジンガ (Johan Huizinga 1872-1945) に関する研究は、これまで様々な分野で行われてきた。歴史学をはじめ、社会学、教育学、哲学、文化人類学、体育学と、その研究領域は広い範囲に渡っている。ホイジンガの業績は、扱い方によって色々な読みと理解が可能であるが、ホイジンガその人をどのように認識するかによって、研究の方向も変わってくる。そこで本稿は、ホイジンガを三つの顔に分け、ホイジンガ研究の動向を探ってみることにした。

第一に、歴史家としてのホイジンガに関する研究。第二に、遊びの研究家としてのホイジンガに関する研究。第三に、近代文明批評家としてのホイジンガに関する研究である。

文献を調査する範囲は、今世紀中に出版された著書、雑誌掲載論文、翻訳書のあとがきなど、わが国に限らず、できる限り広範囲に当たってみることにした⁽¹⁾。

なお本稿は、ヨハン・ホイジンガ研究の動向 (1) とあるように、紙幅の都合から、歴史家としてのホイジンガに関する研究と、遊びの研究家としてのホイジンガに関する研究の二つについて報告することにした。近代文明批評家としてのホイジンガに関する研究は、続く後編 (2) でレビューすることにした。

1. 歴史家としてのホイジンガに関する研究

歴史家としてのホイジンガといっても扱われる内容は多岐に渡っている。ホイジンガが歴史家になった背景を彼の生い立ちから紹介するものや、歴史研究の方法、歴史認識、文化史に関する内容まで、その範囲は広い。それだけに体系的にまとめるのは困難であるが、同時に、ホイジンガ研究の広さをあらためて実感する。

そこで、とりあえずは前述した観点で、一つずつ研究動向を見てみることにしたい。

まずは、歴史家ホイジンガの人となりについてである。この種の内容を紹介する文献は、ホイジンガの生前よりも、死後に書かれたものが多い。いかに大家といえどもその生涯と業績はやはり他界後に評価され、

偉大さも含め、懐古調に書かれるようである。

スイスの歴史家ケーギ (Werner Kaegi) は、ホイジンガの歴史的業績を、ホイジンガがこの世を去った二年後にまとめた。生前、ホイジンガと親交があったことから、その思想的背景について多くを語っている⁽²⁾ (Kaegi 1947)。ホイジンガの思想的背景に、倫理・道徳が常に介在しているのは、幼い頃に読んだアンデルセン童話の影響であるといったり、『ホモ・ルーデンス』の起源は、ホイジンガが17歳の時に読んだ Edward Burnett Tylor の『Primitive Culture』にあるといったり、親交が深かっただけにその記述は興味深い。歴史的な業績についても紹介しているが、分量からすれば後の研究書には及ばない。それゆえ、この著書は、ホイジンガの主要作品の背景を、当時の出来事と照らし合わせて理解するのに役立つ。また、ホイジンガの最期を見とった人物の話はとりわけ印象深い⁽³⁾。

Valkenburg が著した『ホイジンガの生涯と人格』(1946) も、ホイジンガの人となりについての解説書の類である。著者は18歳の時にホイジンガと出会い、その後50年以上の付き合いがあった関係にある。様々なエピソードを交えながら、ホイジンガの人格を作品の中で紹介したこの著書も、親しい間柄ゆえの成果である。ホイジンガはスポーツが苦手で、フェンシングを少しと、遊びでビリヤードを楽しむ程度であったこと、また一方で、ありのままの自然の中を散歩することを好んでいたことが記されている。学生時代のホイジンガは確かに優秀であったが、シャイなため、女性に対しては特に不器用であったこともコミカルに書かれている。

ホイジンガの業績や思想的な背景については、後に多くの研究家が詳細に著したが、宗教的背景について取り上げられることはほとんどなかった。そのような中で、ライデン大学の神学者 Heering は、ホイジンガの宗教的背景について詳しく記述している (Heering 1948)⁽⁴⁾。

ホイジンガは歴史学者として自らの意志を全面的に表に出すことはなかったため、ある種閉鎖的な性格と捉えられがちであるし、ホイジンガの作品を非宗教派

の人間が読めば、彼をヒューマニストとして考えるであろうが、Heering は、それをきっぱりと否定する。ホイジンガとのつきあいを通して Heering が知ったことは、ホイジンガは確かに教区民となっていなかったし、特定の教派や派閥に所属して活動することはなかった。だが、それゆえにホイジンガが無宗教であるかといえば違う。多くの歴史学者が宗教をもっているように、ホイジンガもキリスト教を信仰していた。しかし、世界と人生の意義を考える上で、宗教には限界があると気づいたとき、ホイジンガは同じ内容を課題として扱う歴史学に没頭したという。つまりホイジンガは、キリスト教を基礎に置きながらも、特定の教義に入り込むことはなく、世界と人間の営みに関する事柄や意義を歴史学の中に求めたのである。

さて、ホイジンガの人生と研究業績に関する文献についてであるが、それらは主に、戦後の研究者によって数多く著された。わが国でも小松原が1954年に「文化史家ヨハン・ホイジンガの生涯と思想」を発表し、歴史を全体として捉えようとする文化史家、反ナチスの英雄的なレジスタンス運動家として紹介している。

堀米も1968年に「ホイジンガの人と作品」で生い立ちから歴史家への道を書いている。歴史学の常道への抵抗のうちに書かれた『中世の秋』、その中世文化を見る方法概念としての「夢と遊び」、それが後の『ホモ・ルーデンス』へと発展したと記している。

だが、日本において、ホイジンガの生涯と思想を最も分かりやすく著しているのは、おそらく栗原の『ホイジンガ その生涯と思想』（1972）であろう。200頁以上にも及ぶ力作は、ホイジンガの生涯と、その時々作品を、彼の思想と合わせて実によく記している。

当然と言えばそれまでではあるが、ヨーロッパではわが国よりもホイジンガ研究が活発に行われてきた。むろん分野やテーマによって、それも一概には言えないが、少なくともホイジンガの母国オランダでは高い水準で研究が進められた。

戦後、ホイジンガの生涯と研究活動に関する多くの解説書が出版されてきたが、ここにきてそれが集大成されている。特に、三人のオランダ人歴史家によるホイジンガ研究は、文献の質、量ともに他をリードしている。

Lem は、ホイジンガ研究の分野では明らかに世界の第一人者である。ホイジンガの人となりについては、人生のそれぞれの時期と作品について詳細に報告している（Lem 1993）。ホイジンガの思想に影響を与えたと考えられる人間関係、ホイジンガの身近に起きた出来事、講義・講演の内容、さらにはかなりプライベートな手記まで分析の対象に入れて総合的に捉えている。

Krul も『Historicus tegen de tijd』（1990）で、ホイジンガを幾つかのテーマに分けて紹介している。ホ

イジンガの家族関係、学生時代の生活、言語学と歴史学に関する早期の業績、近代文明、オランダ文化、文化史に関する業績など、ホイジンガをテーマごとに理解し解釈している。

もう一人、ホイジンガをトータルに研究しているのが Hanssen である。ここでは彼の業績を具体的に挙げることはしないが、前二者とともに、莫大な量のホイジンガ往復書簡集を出版したことで評価されている。

ホイジンガの研究方法与歴史認識に関しては、多くの論議が起きた。というのは、1919年に出版された『中世の秋』が、歴史を新たな視点で捉えたからである。歴史を叙述的に、しかもあらゆる資料を使って時代の精神を描こうとするスタイルは、一方で歴史を理解する新鮮さを感じさせたが、他方では科学的ではないという批判を受けた。『中世の秋』に代表されるその様なホイジンガのスタイルは、実はホイジンガの学生時代に起きた80年代運動に影響の端を発していると Tollebeek はいう⁽⁵⁾。

80年代運動の影響を受けたホイジンガは、歴史学においても、科学的実証主義に反対する立場をとった。これがホイジンガの歴史に対するアプローチの起源となり、叙述する歴史、読み手に興味をわかせる歴史を方法に取り入れたのである。しかし、この手法は、ホイジンガが自ら学派を創らなかったこともあって、後継者は育たなかった⁽⁶⁾。（Tollebeek 1996, p. 244）

学派に関して言及しておけば、多くの歴史学者は学生時代に学んだ歴史学によっていずれかの流派に属するものであるが、ホイジンガが特定の流派に入らなかったのは、学生時代に比較言語学を専攻していたことによる。それゆえに、ホイジンガの個人的才能と時代思想との対話から、独特の歴史観が生まれたと Kaegi は分析している（1947, p. 13）。

ホイジンガが歴史研究で重んじていたのは、歴史的事実をイメージとして呼び起こし、それに解釈と意味を与えることであった。そのため、解釈によっては時代のイメージも変わりうる（Kuiper 1993, p. 43）。だが、当時の歴史学は、歴史をドラマやイメージとして呼び起こすことをしなくなった。そのためホイジンガは、19世紀までの歴史の描き方を再評価し、独特なスタイルを採ったのである。大切なことは数字や統計で歴史を見るのではなく、精神としての歴史を語ることであった⁽⁷⁾。

ホイジンガのもとで歴史学を学んだ Baudet は、ホイジンガの関心事、または精神モードが、物事の活動や変化ではなく、その本質にあるといっている。すなわち、文化と人間の精神構造に力を注いでいたのである。そして、歴史は多様性を持ちながらも、歴史とそこに生きた人間の人生は、いつの時代にも普遍的なものが存在していて、本質的には変化しないとホイジン

がは考えていた。政治・経済は人間の本質ではなく、それを超越したところに人間の本質があると考えていたのである。⁽⁸⁾ (Baudet 1962, pp. 462-463)

わが国の歴史学者はホイジンガのスタイルと歴史認識をどう見ていたのであろうか。

ホイジンガの生前に、早くも島田（1940）がホイジンガを批判した記事を書いている。その主張によれば、ホイジンガの歴史学は客観的ではなく、最も極端な意味において主観的である。ホイジンガにとっては、過去が本来どうであったかは理解されず、過去がどう見えるかが問題となっているに過ぎない。それは歴史の観照的立場である。歴史を明確な形態として捉えず、一般形態学にいたる道は閉ざされている。ただの特殊形態学に満足しているホイジンガは、なんら新しい史学の創造に寄与しなかったばかりでなく、「古物的歴史」の再版であり、「年代的歴史」の復活に他ならなかった。『中世の秋』に限らず、『エラスムス』、『文化史の道』等も引用しながら、島田はホイジンガの歴史認識と手法をかなり厳しい口調で批判した。

確かに『中世の秋』は、ある種ホイジンガの独特の手法によって歴史を叙述したものである。しかし、それが時代の精神をより明確に表現しているならば、あるいは捉えることができるならば、評価に値するといってもよいのではなかろうか⁽⁹⁾。

後にこの問題は『中世の秋』をはじめ、多くの文献を研究材料として、ホイジンガの歴史認識やスタイルについて研究した堀越（1990）によって、名誉挽回とも言おうか、ホイジンガの魅力が再評価されていた。

ところで、ホイジンガの著作の多くは、第一次大戦後には欧米諸国でかなりひろく読まれるようになり、わが国でも全く手に入らないというほどではなかった。語学が堪能な歴史家にしてみれば、それを読みこなすことができたはずである。事実そうであったのに、わが国では第二次大戦まで、ホイジンガが議論の対象として話題にあがることは少なかった。

その理由として、栗原（1972, 21-23頁）は、当時の日本が、西洋史研究におけるドイツ歴史学、あるいは社会経済史研究における歴史学派やマルキシズムの圧倒的影響の影にかくれて、ホイジンガ史学の全貌は必ずしも理解され評価されるに至らなかったことをあげている。ランケによって確立されたドイツ近代歴史学は、19世紀後半から20世紀にかけてヨーロッパの歴史学に圧倒的な影響を与えたが、その厳正な資料批判に基づく科学的・分析の方法は、歴史研究と歴史叙述を分離せしめ、歴史叙述はややもすると軽視される傾向があったという。ホイジンガはまさにその受難の内にあったといっても過言ではなかろう。

これに関連して、岸田（1971）は、二人の西独史家を引き合いに出して、ホイジンガの歴史理論の捉えら

れ方を分析している。ヘルツレ（Erwin Hölzle）がホイジンガの歴史理論を批判したのに対し、コンツェ（Werner Conze）はホイジンガがいう歴史の「形態変化」を歴史の「構造変化」として捉えなおし、それとの関連において、いわゆる「構造史」の問題を提起した。そして、ホイジンガにとって歴史の「形態変化」が、歴史の「形態喪失」であったことを唱え、この「形態喪失」に伝統的歴史叙述の凋落を対応させた。そこにコンツェのユニークな見識があったと岸田は考えたのであるが、一方ではホイジンガの手法を評価しているとも読めるのである。ヘルツレのような伝統的なドイツ正統派史学に対し、コンツェのようにドイツ正統派史学に属しながらもその伝統に対する反省を示した動向が、戦後の西独史学にみられたことを岸田は記している。

ホイジンガにとって、歴史は最も学問的な形態の場合でさえ、興味深く読めるということが価値判断の基準であり、読んで面白くない歴史は歴史ではなかった（Huizinga 1941, p. 195）。そして、叙事詩的・劇的要素を重視したのである。ところがホイジンガの時代になって、この要素が消滅する傾向にあった（Huizinga 1941, p. 197）。読者にとって面白味のある叙事詩的・劇的要素をもった歴史叙述が衰退の危機に瀕していたのである。そこにホイジンガは歴史学のある種偏りを感じていたのであろう。

では、ホイジンガの歴史叙述には客観性が欠けているのであろうか。

歴史解釈の主観性と自由を主張するホイジンガにも、客観的な理解を試みようとする努力が失われていたわけではない。アントーニ（訳書 1959, 242頁）によれば、芸術家の主観性と歴史家の主観性を混同するべきではなく、ホイジンガの場合、決して専門の科学的価値の感情を失いはしなかった。ホイジンガは耽美的ディレッタンチズムから離れて客観性に向かって努力する。理論的には支持されにくい立場にはあるものの、ホイジンガのうちに健全にして善良なる歴史家の感覚が、歴史叙述を客観的にしているのである⁽¹⁰⁾。

つまりホイジンガは、主観的であるといわれながらも、歴史家としての善良かつ客観性をもった目で歴史叙述を行い、そこに歴史の劇的要素と美的要素を鮮やかに描いたのである。科学的な方法が決して悪いというのではなく、それをあまりにも厳格に適用することによって歴史の魅力が失われることを避けたのである。

これまでにホイジンガの歴史研究のスタンスと歴史認識をみてきたが、文化史に関する研究についても簡単に紹介しておきたい。

19世紀最大の文化史家をブルクハルトとすれば、20世紀のそれはホイジンガであるといわれる。文化史は

何よりも、ある時代またはある社会の「生の形式の歴史」であり、ホイジンガの場合、感情の歴史、感情の雰囲気を書述する文化史であった。そして、文化史そのものには公式といったものはないと下村はいう。(1972, 146頁)

また、ホイジンガは、歴史を眺めることとして表現すること、「像」を呼び起こすことと考えた。ブルクハルトが自己の文化史の理想としながら果たしえなかった「芸術と文化の融合」をホイジンガは果たしたのである。その傑作が『中世の秋』である(下村 1972)。

里見(1965)は、ホイジンガが著した「文化史の課題」を、歴史家としての独自性を示すエッセイとして評価している。これは、ホイジンガが歴史家としての立場に最も悩んだ末、理性と感覚の融合の場を形態に求める試みから書かれたものであるという。そして、文化史の課題は、文明の代表的な歩みを形態学的に表現することであるとホイジンガは考えた。

文化史への貢献という観点からホイジンガを捉えた Weintraub は、ホイジンガの偉大性を、その感受性と芸術的手腕に見いだしている。ホイジンガは文化史を記述する際、その質を高めるために、文化史家としての習性と務めを認識しながら、独特の理知的な考察を行った。科学的背景をもった主張とは距離をおき、社会全体のモードとしてのつかみ所のない事柄に対する趣向をもっていたのである。例えば、美しい夢の探究、美学的なものに対する趣向、人間の気質、などについてである。そして、ホイジンガは、文化を説明する一つのカギを、人間がもつ遊びの本性(説明の難しい、不必要な、理性を超越した要素)に見つけた。(Weintraub 1969, p. 15, 290)

2. 遊びの研究家としてのホイジンガに関する研究

遊びは、様々な世界でしばしば話題にあがる。それは学問的な領域に限らず、日常的な活動の一部としてもその意味や機能が語られる。その様な中でホイジンガは遊びの研究家として真っ先に取り上げられることが多い。遊びに関する莫大な文献を見渡せば、ホイジンガに触れる記述は実に多いのである⁽¹¹⁾。

しかしここでは、ホイジンガに関して記した文献の中でも、特にホイジンガの遊び概念を中心に話しを進めてゆきたい。

周知のごとく、ホイジンガを遊びの研究家として著名にしたのは、1938年に出版された『ホモ・ルーデンス』である。これによってホイジンガは遊びを本格的に研究した大家として一躍世界にその名を響かせた。『ホモ・ルーデンス』は、文化のもつ遊びの要素を古今東西の歴史の中に見い出した作品であるが、この著書は、言語学、文化人類学、歴史学、文化史といった幅広い領域にまたがった学際的な見地から書かれてい

る。それだけにホイジンガの守備範囲の広さに、ただ脱帽してしまう。だが、この作品はホイジンガの研究生活のなかで、にわかに現れた発想ではない。長年、文化を考えてきた中で温め続けていた遊びとの連関が、見事に大成したものであるという見方が一般的である。

わが国において、ホイジンガの遊び論に関する記事を初めて書いたのはおそらく西野(1953)であろう。彼は自らを史学には門外漢であるといいながらも、ホイジンガの『ホモ・ルーデンス』を瑞々しく紹介した。西野は『ホモ・ルーデンス』をいち早く原書で読み、歴史学者よりも先に文化と遊びに関するホイジンガの概念に言及したのである。西野は、文化とは喜劇であり遊びであるが、歴史とは悲劇であることを、ホイジンガは『中世の秋』で展開し、同じ考えのもとに『ホモ・ルーデンス』も書かれたとみている。

『ホモ・ルーデンス』の起源と書かれた経緯や背景については様々な議論がある。Vollgraff (1945, p. 14) は1903年までその起源を遡ろうとする。この年の何にその起源が確認できるのか具体的に記していないが、ホイジンガはこの後に文化と遊びを関連づけて考えるようになったという⁽¹²⁾。

しかしホイジンガが遊びと文化を明確に関連させて考えていたことがわかるのは、1919年に著された『中世の秋』である。この著書は、前述したように、歴史研究の方法から論議されたが、他方で、文化を夢と遊びという概念を通して眺めてみようとしたことから話題を呼んだ。

堀米(1968)は、『中世の秋』が歴史叙述の書であるのに対し、『ホモ・ルーデンス』は方法論的色彩の強い研究であるといっている。そして『ホモ・ルーデンス』の骨子は、『中世の秋』のなかの「より美しい世界への三つ道」のなかを示された「夢と遊び」のアイデアにあるとみている⁽¹³⁾。夢と現実をつなぐのが遊びであり、そのために日常生活とは別の世界が形づくられる。遊びが真面目であるといったのは、夢(理想)が真剣なものであることをいうためである。堀米はこのように『中世の秋』から『ホモ・ルーデンス』への思想的な流れを指摘している。

里見は別の観点から、「遊び」こそがホイジンガの文化史観の中核をなすという一方で、遊びはホイジンガにとって、言語学的着想と反省、及び民族学(文化人類学)的知識の集積を経て登場してくる概念であるという。そして、遊びは形式ではなく、形式に従って行動することが遊びであるという。また、遊びという言葉が演技するという意味を合わせもっていることをして、騎士や宮廷人は遊んでいたというより演技をしていたと指摘する。遊びは演技であることが強調されるべきで、演じること、つまり真似ること、再現してみせることによって文化の形式は伝えられてゆくと、自

らの発想をホイジンガからヒントを得て展開している(里見 1973)。いずれにせよ里見も、『中世の秋』をもとに、遊びと文化、『ホモ・ルーデンス』を語っていることに違いはない。

さて、遊びの研究家としてのホイジンガに関する研究は、やはり『ホモ・ルーデンス』を中心に扱っているものが多い。研究されたものを分類するとすれば、ホイジンガの遊び論そのものに関する研究、ホイジンガの遊び論を他の学問領域との関連で研究するもの、他の遊び論者との比較研究、この三つに分けることができる。

まず、ホイジンガの遊び論そのものに取り組んだ研究は、前述したように『中世の秋』あるいは他の文献から遊び論の背景を探ったものや、文化と遊びの相互関係を考察したものがある。その他によく行われるのが、ホイジンガの遊び概念の検討である。

ホイジンガの遊び概念に関しては、これを積極的に評価して考察するものと、批判的に検討するものとがみられる。

前者のうち Norbeck (1977) は、人類学への貢献を主張し、初めて遊びそのものを学問のテーマとして取り組んだ功績を評価している。遊びの研究が西欧で遅れていた原因はプロテスタントの倫理観にあるが、今日、遊びは生命体としての人間において、充分研究に値するテーマになったといっている。子どもの遊びについてはこれまでも研究されてきたが、遊びの本質を突いたものはなかった。遊びは誰も知っている事柄でありながら、それを定義することは難しい。この点でホイジンガは、遊びの本質を考える材料を人類学に提示したことで評価されるべきであるという。

後者の立場、つまり批判的にホイジンガの遊び概念を捉えたのが山田である。山田(1995)は、ホイジンガが「遊び」と呼んでいる活動は、「社会的遊び」「比較的高級な遊び」であり、「遊び一般」を指してはいないと指摘している。また、「遊び一般」の定義を行っていない点も批判している。これについては、ホイジンガ自身、遊びを厳密に定義することの難しさに言及しており、それを承知の上で遊びの形式的特徴を挙げている。その形式的特徴のそれぞれについて、山田は細かく検討・考察しているが、どうもあら捜しの域を出ていない感がする⁽¹⁴⁾。この手の批判は山田に限らず他にもあるが、あえて紹介する意味もないので、ここだけに留めておきたい。このようにホイジンガの遊び論を、遊びそれ自体の研究者が様々な研究領域から批判的に語ったものは多い。しかし、細分化した研究領域の窓からホイジンガを見て判断しようとするのは無理があると同時に誤りであろう。

次に、他の学問領域との関連でホイジンガの遊び論を研究したものである。前述した山田も幼児教育の分野からホイジンガの遊び論を見ている。このような見

方でホイジンガを捉えようとする研究者の多くは、ホイジンガの遊び論を自分のフィールドに当てはめて考察しようとする傾向がある。

体育・スポーツの世界では、しばしばホイジンガの遊び論が取り上げられる⁽¹⁵⁾。これはスポーツが遊びと密接な関わりをもっていると考えられているからである。スポーツに関する研究の中でも人文社会系の領域においては、『ホモ・ルーデンス』で述べられた、遊びの形式的特徴、闘技的要素、美的領域など、ホイジンガに学ぶ点が多い。スポーツの本質や根本的な原理を遊びに見いだそうとするもの、スポーツの魅力を結果としての勝敗よりもプロセスにおける面白さに求めようとするもの、スポーツを美的領域の文化と捉えようとするもの、これらは一様にホイジンガの遊び論を踏まえて考察する傾向が見られる。

Henricks は「スポーツ研究におけるホイジンガの遺産」(1988)のなかで、スポーツにおけるホイジンガ研究は、文化としてのスポーツよりも、スポーツのエレメントに関する研究が主であるといっている。また、Henricksは、スペクテイター・スポーツを、ホイジンガが文化的に不毛のものとして認識していたと考える。それはナチスの「見せかけの遊び(政治的・社会的目的のために操作される遊び)」と「幼稚な行為(無邪気さを装った野蛮な振る舞い)」に墮落の根拠を求めるからである。

もともと Henricks の論文は、ホイジンガのいう遊びの形式的特徴が、社会活動として行われるスポーツのなかで、実際、どれほど整合性をもちうるかを論じている。この種の観点からスポーツの分析を試みる研究者がいるが、『ホモ・ルーデンス』で述べられた遊びの形式的特徴のみを抽出してスポーツを見ようとする態度は好ましくない。だが、Henricksはそこから一歩踏み出して、最終的に二つのより体系的な理念型を提示した。分離あるいは完了行動の活動としての遊びと、秩序に対する特別な関係である。そして、他の遊び研究家と比べて、ホイジンガの功績の偉大性は、遊びにおける緊張と創造性の要素をあげたことにあるといっている。

第三に、他の遊び論者、あるいは他の領域の遊びの研究家とホイジンガを比較させて考察を試みるタイプの文献を取り上げたい。

ホイジンガと並ぶ遊びの研究家として、必ずといってよいほど話題に上るのがフランスの社会学者カイヨワ(Roger Caillois)である。カイヨワの功績の一つに遊びの分類があるが、これをホイジンガと比較させて考察するか、ホイジンガの遊び概念全体とカイヨワとの相違点を主題に論じたものは多い⁽¹⁶⁾。また、他の遊び研究家との比較も見られるが、やはりカイヨワとの比較が多い。そこで本稿ではホイジンガとカイヨワの比較研究に絞って見ることにする。

これを早い時期に、しかも明解に行ったのが多田(1971)である。

多田は、真面目と遊びの関係をとり上げ、ホイジンガがプラトンに基礎的な考え方を求めているのに対し⁽¹⁷⁾、カイヨワはこのやっかいな問題を慎重に避けているという。カイヨワは、「真面目」を態度の問題ではなく、社会と文化の構造の問題として扱い、真面目な構造は別の言葉で「俗」と呼ばれ、時には組織、制度としての「聖」と呼ばれるとした。そして、この慣習、制度と遊びの間には、補償作用か黙契かの密接な関係が必ず存在しているというのである。つまり、遊びと「真面目な構造」とは、互いが互いにとっての説明原理であるばかりでなく、その間に密接な関係があると多田はカイヨワを理解している。そして遊びを遊びでないものから分かち、さらに遊びそのものを納得しうるカテゴリーに分類しようとするなら、カイヨワ的接近法が妥当だといっている。

次に多田は、遊びの定義について両者を比較した。ホイジンガを批判したカイヨワ自身、遊びの定義においてはホイジンガの枠を出ていないという。しかし多田は、ホイジンガが遊と聖を同一視あるいは混同していた点について、カイヨワがこの二つの区別をつけたことに積極的な評価をしている⁽¹⁸⁾。

ホイジンガとカイヨワの相違点に関して多田が指摘した最も鋭い点は、二人の遊び研究の方法論の違いである。ホイジンガは、文化史の立場から歴史的に遡及し、遊と聖が重なりあう時点で遊びの原型をさぐりあてた。これは歴史的方法であり、しかも、それは分析者にとっての価値の源泉を示す方法でもあった。これに反し、カイヨワの方法は、没歴史的とは言わずとも、少なくとも遡及的方法をとらない。カイヨワは、近現代における遊と聖の要素のあらわれに注目し、それらの機能にもとづいて「聖・俗・遊」のヒエラルキーを構想したというのである。

また、ホイジンガは遊びの動機として「競争」と「模擬」の二つのカテゴリーしか提出し得なかったのに対し、カイヨワはこの二つに加えて「運」と「眩暈」を提出したことを功績にあげている。多田は、これが遊びの理論に決定的な新生面を開いたとして評価している。

岸本も、ホイジンガとカイヨワの視座と見解の異同に関して論文を発表した一人である(岸本 1999)⁽¹⁹⁾。その中で、ホイジンガは「遊び」を〈文化＝価値創造〉行為のコンテクストの中に積極的に位置づけようとしているのに対し、カイヨワは「遊び」固有の特質を、現実的世界および超越的世界との対比において明確化しようとしていると言っている。この指摘は、両者の遊び研究の基本特徴の差異をはっきり示している。岸本はこれを踏まえて、さらに幾つかの項目を起こし、両者の違いを分析・考察している。

まず、遊びと社会文化との関係について、ホイジンガは〈歴史社会的実体連関〉として捉えようとしているのに対し、カイヨワはどちらかといえば〈社会学的分析的視座〉から〈現象的機能連関〉として捉えている。視座も方法も基本的な点で相違している。

次に岸本は、遊びと社会の相互関係を、遊びの墮落形態から両者の主張を比較している。カイヨワにおける墮落の基準が〈隔壁と規則の侵犯〉にあるのに対し、ホイジンガは〈本質的遊び要素の喪失〉にあるという。

さらに、遊びの内実とその根本基底に関して、カイヨワが〈本能に基準をおく多元論〉とでもいうべきものであるのに対し、ホイジンガは〈精神的契機を組み込んだ力道論〉というべき方向をとっている。カイヨワが本能的衝動の〈解放局面〉に力点を置くのに対し、ホイジンガは精神的〈価値創造局面〉を視野におさめているという点に違いがあると岸本は指摘している。

ここにきて言うのも遅いが、忘れてならないのはカイヨワその人のホイジンガ批判である。カイヨワは、ホイジンガが遊びはすべて同じ要求にこたえ、一様に同じ心的態度を表現しているかのごとく考え、遊びの分類を無視していると言った。そして『ホモ・ルーデンス』を遊びの研究書ではなく、文化の分野における遊びの精神の創造性の探究であるとした。

カイヨワは、まず遊びの定義から考え直した。また、前述したようにホイジンガが遊と聖を混同していることを指摘し、独自の概念を提出した。

さらにカイヨワは、ホイジンガから見ればおそらく程度の低い行為である「眩暈」、そして賭けや偶然の遊びである「運」を、遊びの研究家が遊びから締め出してしまうのは偏見であり、現実的な視点が欠けているという。彼は『遊びと人間』の最後で、『ホモ・ルーデンス』の最終章に書かれている現代における遊びの基本要素の頽廃を、過去を賛美する人の眼で見た錯覚に過ぎないと批判し、これを信用してはならないとまで言っている(Caillois 訳書 1987, 298頁)。このようにカイヨワのホイジンガに対する口調はかなり厳しいが、他方で、遊びの根本的な性格を見事に分析し、文明の発展における役割の重要性を明らかにしたことは、ホイジンガの功績として長く残ると評価している(Caillois 訳書 1987, 30頁)。

ホイジンガが遊びのなかでも世俗的な遊び、または運や眩暈の要素を取り上げなかったのは、貴族主義的な視点から物事を見ているためであるという見解もある(丹羽 1979)。堀米とジャンセンも同様に、ホイジンガの限界は、政治・経済、社会組織といった要因を考察の対象に入れていないことだと言っている(堀米 1967)。

確かにカイヨワをはじめこれらの指摘には一理あるが、それでもホイジンガはこの時代にあって、誰よりも先に遊びを学問の領域に高め、遊びを文化創造の機

能として位置づけた功績は大きいと言わざるを得ない。

そしてこの後、ホイジンガからカイヨワを経て、多くの遊び研究家が世に輩出されたのである⁽²⁰⁾。

本稿のおわりに

ホイジンガ研究の動向は、本稿と次稿で完結するため、「まとめ」は次稿で記すことにしたい。

〈注〉

- (1) ホイジンガ研究について調べる範囲を今世紀中に限ったのは、ホイジンガの生年と業績からして、そのほとんどが20世紀に集中しているからである。また、できる限り世界的に目を向けて文献収集を行ったが、莫大な数と、質や量の多様性から、限界があることは否定できない。そのため恣意的ではあるが、本稿の主題と関連したものうち、主要と考えられる文献について扱うことにした。
- (2) ホイジンガを紹介する文献は生前にも幾つか見られるが、歴史家としてのホイジンガをよく紹介しているのはケーギであろう。ホイジンガと頻繁に研究交流をしていたケーギは、多くのホイジンガの著書を独訳した。ヨーロッパにおいてホイジンガが著名となったのは、ケーギによるところが大きい。
- (3) ホイジンガは死期が近づく中で、連合軍が再び平和を取り戻すであろうことを感じていたという。平和は人間の哀れみ深い心によってもたらされるが、その心は神に委ねられていると信じていた。連合軍の足音がすぐそこまで来ていることを知ったホイジンガは、平和への祈りと確信の中に息を引取ったという。
- (4) Prof. Dr G. J. Heering は、ホイジンガと同じライデン大学で教鞭をとる神学者である。ホイジンガとは20年来のつき合いがあり、毎週水曜日、他の三人の学者と共に「散歩クラブ」と名付けた集まりを通して、時事問題や個人の関心事についてあれこれ散歩しながら話したという。
- (5) オランダの80年代運動は文学芸術運動であるが、もともと全ての事柄を数や量で表そうとすることに対する批判から起きた。つまり、数量化主義とでもいうものによって、全てが表現・支配できるという考え方、例えば科学・技術によって自然を支配できるという信念に対する批判である。人間の非合理的な認識を抑圧しようとする態度が、80年代運動のライフスタイルの要因でもある。
- (6) 確かにホイジンガは80年代運動の信奉者であったが、運動が合理主義を批判して、芸術主義と主観主義に偏るや、やがて80年代運動と距離をおくようになる。これはそれまでの信念を変えたというわけではなく、科学か芸術か、どちらかを選択しなければならないという考えに自身の納得がゆかなかったのである。ホイジンガは、一つの体制に没入し、思考の柔軟性が失われることを避けようとした。可能な限り、客観的に物事を分析・評価する姿勢を忘れなかったのである。近代化としての歴史の実証主義に対して、80年代運動を通して反対の立場をとったのは、学問が一つの方法だけによるという態度は避けられなければならないと考えたからであろう。
- (7) Kuiper は、ある文化のエピソードを知ること、真実として経験ならしめる史詩、ドラマティックな要素、これらが近代になって少なくなったことを以下の例によって説明する。
フランス革命はドラマティックに描けても、ロシア革命はそうはいかない。アメリカの南北戦争は、理想も対立する人物

もありドラマティックに描けるが、その後のアメリカは、経済と集団が全面に出てドラマティックに描けなくなってしまう。

また、絵画は近世までの文化であり、近代以降は写真が物事を表すようになった。その昔、絵画は歴史を劇として表現したが、近代絵画にはそれが見られない。まして写真は断片的瞬間を写し取っただけでありドラマがない。(Kuiper 1993, p. 141)

- (8) かといって、ホイジンガが政治・経済に全く盲目であったり、現実から目を背けていたというわけではない。現実の一つの分析から理解して説明できるものではないと考えていたのである。事象は、その場、その時にある説明でつぎというよりも、多様性をもちながらも普遍的なものが存在していると考えるのである。(Baudet 1962, p. 465)
- (9) これについては堀越が鋭い指摘をしている。

『中世の秋』は、現実の記録の仕方、記録の読み方の問題を論じている。時代の美的表現、芸術活動について、ただそれを紹介するというのではない。およそたとえばある時代の現実の記録の仕方が、どうみても文章より絵のほうが的確に現実を記録しているという事態がもし確認できたとしたら、その絵を、その時代の現実を理解するための材料として大いに使うべきではないか。(堀越 1987, 131頁)

ホイジンガは、中世の秋の風土に生きる人々の心理、感情のくせを観察し、できるだけ沢山の人々について観察して、いわば中世の秋の心理感情コンプレックスを描き出してみせる。これがホイジンガの狙いであった。(堀越 1987, 148頁)

- (10) ホイジンガの業績の中には、歴史を客観的に分析している論文もある。「ルネサンスの問題」(1920)がその代表とされる好論文であり、里見はガイル (P. Geyl) を引用して、論文の批判的態度の素晴らしさを指摘している。これには、ホイジンガ特有の夢、感興が薄い(里見 1978, 270頁)。
- (11) 例えば、雑誌で遊びに関する特集が組まれた場合、しばしばホイジンガの名が登場する。一例をあげれば、『新評』(1971)、『現代思想』(1983)などがそうである。また、遊びをテーマとして様々な作家が語るような書籍にもそれがいえる。(参照、松田編 1975)

レジャー・レクリエーションの領域でもホイジンガは遊び論の創始者として引き合いに出される。その場合、人間の本质としての遊びを説いたホイジンガを援用して、レジャー・レクリエーションの価値や意義を説いているようである。

- (12) Vollgraff は、おそらくホイジンガがアムステルダム大学私講師となった際の就任講演で話した「仏教の研究と評価について」をいっていると思われる。ホイジンガはここで仏教における謎問答について言及している。『ホモ・ルーデンス』において、哲学のもつ遊びの要素を古代の謎問答で例証した際のヒントを、ホイジンガが仏教における謎問答にみられる遊びの要素に求めたと Vollgraff は考えたのであろう。
- (13) 中世文化は、夢を生活儀礼のなかで遊びとして実現するところにある。ホイジンガが歴史をみる方法概念として「夢と遊び」を用いた理由は、政治・経済、制度などの客体的に捉えやすいものを使って歴史を記し、人間の意志や感情などの捉えにくいものは客体的に捉えたものとの関連において捉えるという、歴史学の常道に対する抵抗にあると堀米は考えた。

なお、ホイジンガと親交のあったスイスの歴史家 Kaegi (1947) も『中世の秋』に『ホモ・ルーデンス』の芽生えをみている。様々な主張があるにせよ、やはり『ホモ・ルーデンス』のアイデアが明確に現れているのは『中世の秋』である。

- (14) 山田はホイジンガの遊び概念の限界を、乳幼児の遊びや教育的価値と絡めて語っているが、これはお門違いというか、何

とも残念である。さらに山田は、あろうことに、ホイジンガが自らを神の立場に置き、そこから全てを見下して、神から見た場合には「全て遊びなり」という判断を下しているともいっている(山田 1995, 563頁)。

しかし最後になって山田も、『ホモ・ルーデンス』が遊びそのものの分析というよりも、遊びと文化を主題としたものであることに気づいたようである。

- (15) 例えば、Higgs (1982) は『ホモ・ルーデンス』を、スポーツを対象として研究する者の必読書であり必須条件として挙げている。Novak (1976) も著書のなかで『ホモ・ルーデンス』を遊びの分野の古典として掲げ、スポーツの楽しさを論じている。

日本の雑誌を見ても、体育の分野ではホイジンガの名をよく目にする。数例あげるとすれば、『体育の科学』にある川村(1964)の「『ホモ・ルーデンス』の提起するもの」、『体育学研究』にある北田・丹羽(1970)の「遊戯研究(その3)―Homo Ludensにみられる遊戯観について―」、『体育社会学研究』にある丹羽(1973)の「遊戯理論の検討(2)―J. HuizingaのHomo Ludensにおける遊戯の概念―」、『新体育』にある高橋(1977)の「“遊びと真面目” ホモ・ルーデンスをめぐる」がある。

- (16) 例えば、多田(1971)の「ホイジンガからカイヨワへ」、宮内(1972)の「ホイジンガとカイヨワのプレイ論」、久山(1974)の「遊戯考―J. ホイジンガ・R. カイヨワの所説によせて―」などがある。

- (17) プラトン『法律』第7巻803にある記述がそうである。

ホイジンガは遊びを精神の最高領域として高い地位に置いている。というのは、「遊び」は「真面目」とともに神に関する事柄の内にあると見ているからである。

そこから真面目と遊びが神の下に同一視され、最も深い基盤としてホイジンガの認識を形成していると多田は考えているようである。

- (18) 第一に、遊びは純粹形式であるのに反し、聖なるものは、内容そのものである。第二に、聖と遊とは類似点をもちながらも、世俗あるいは生活というものを軸に考えるなら、まさに正反対のところに位置する。

- (19) 岸本論文の言わんとする要点は、論文のまとめにあるように、〈俗―遊―聖〉における〈聖〉の意味転換であると思われる。ここではこの内容について詳しく言及しないが、〈聖〉を〈道〉に拡張転換するという提案に独創性がある。

ただ本稿では、ホイジンガとカイヨワの比較研究という目的から、岸本論文にある両者の対比に注目して引用した。

- (20) なかでもこの両者を基礎において遊びを記したと思われるのがDuvignaudである。彼は著書『遊びの遊び』のなかで、古代から近代にいたる西洋の思想家を引き合いに出しながら「遊びの領域」を紹介している。そこでDuvignaudは独自の見解を示そうとしているが、カイヨワの域を超えるものとは考えにくい。

他にも様々な領域から遊びを考察した者は多いが、ホイジンガさらにはカイヨワを超えた画期的な遊びの概念や定義、あるいは分類を成しえたものを見つけるのは難しい。それだけに両者は、遊びの研究者として古典の筆頭にあげられる偉大さをもっているのである。

〈引用・参考文献〉

- 青土社 1983, 『現代思想』vol. 11-2, 青土社。
 アントニーニ, カルロ 1939, 讃井鉄男訳『歴史主義から社会学へ』未来社1959。
 Baudet, H 1962, “Kanttekeningen bij Geyl's kritiek op Hu-

izinga”, *Tijdschrift voor Geschiedenis*, P. Noordhoff Groningen.

Caillois, Roger 1958, 多田道太郎・塚崎幹夫訳『遊びと人間』講談社文庫 1987。

Duvignaud, Jean 1980, 渡辺淳訳『遊びの遊び』法政大学出版局 1986。

Hanssen, Léon 1996, *Huizinga en de troost van de geschiedenis*, Uitgeverij Balans.

Heering, G. J. 1948, *Johan Huizinga's religieuze gedachten*, De Tijdstroom.

Henricks, Thomas S 1988, “Huizinga's legacy for sports studies”, *Sociology of Sports Journal* 1988, 5, pp. 37-49.

Higgs, R 1982, *Sports: A reference guide*, Westport, CT: Greenwood Press.

久山満夫 1974, 「遊戯考―J. ホイジンガ・R. カイヨワの所説によせて―」『武蔵大学人文学会雑誌』5-3・4号。

堀越孝一 1964, 「中世ナチュラリズムの問題」『史学雑誌』第3, 4号。

———— 1987, 『騎士道の夢・死の日常』人文書院。

———— 1990, 『中世の精神』小沢書店。

堀米庸三 1967, 「ホモ・ルーデンスの哲学」『中央公論』82, 86-95頁。

———— 1968, 「ホイジンガの人と作品」Huizinga 著・堀越孝一訳『中世の秋』所収, 中央公論社。

Huizinga, Johan 1903, “Over studie en waardeering van het Buddhisme”, *Verzamelde werken I*, Tjeenk Willink, 1948.

———— 1919, “Herfsttij der middeleeuwen” *Verzamelde werken III*, Tjeenk Willink, 1949.

———— 1920, “Het probleem der Renaissance”, *Verzamelde werken IV*, Tjeenk Willink, 1949.

———— 1924, *Erasmus*, Tjeenk Willink.

———— 1930, *Wege der Kulturgeschichte*, Drei Masken Verlag.

———— 1938, *Homo Ludens*, Tjeenk Willink 1940.

———— 1941, “Over vormverandering der geschiedenis”, *Verzamelde werken VII*, Tjeenk Willink, 1950.

Kaegi, Werner 1947, *Das historische werk Johan Huizinga*, Universitaire pers Leiden.

川村英男 1964, 「『ホモ・ルーデンス』の提起するもの」『体育の科学』14-4。

岸本晴雄 1999, 「〈遊びと人間〉その人間学的検討に向けて」『研究紀要』100号 日本福祉大学。

岸田達也 1971, 「ホイジンガと西独史学」『紀要』15 名古屋大学教養部。

北田明子・丹羽劭昭 1970, 「遊戯研究(その3)―Homo Ludensにみられる遊戯観について―」『体育学研究』14-5。

小松原健太郎 1954, 「文化史家ヨハン・ホイジンガの生涯と思想」『西洋史学』第2号。

栗原福也 1972, 『ホイジンガ―その生涯と思想―』潮新書。

Krul, W. E. 1990, *Historicus tegen de tijd*, Historische Uitgeverij Groningen.

Kuiper, Mark 1993, *De vaas van Huizinga*, VU Uitgeverij Amsterdam.

Lem, Anton van der 1993, *Johan Huizinga. Leven en werk in beelden & documenten*, Wereldbiblio theek.

松田道雄編 1975, 『あそび』筑摩書房。

宮内孝知 1972, 「ホイジンガとカイヨワのプレイ論」『早稲田大学学術研究(総合編)』21。

- 西野照太郎 1953, 「ホイジンガと Homo Ludens」『学燈』第三号。
- 丹羽劭昭 1973, 「遊戯理論の検討(2)―J. Huizinga の Homo Ludens における遊戯の概念―」『体育社会学研究』2。
- 1979, 「J. ホイジンガの“Homo Ludens”における遊戯の概念」『遊戯と運動文化』道和書院。
- Norbeck, Edward 1977, “The study of play — Johan Huizinga and modern anthropology”, in *The study of play*, ed. by D. F. Lancy, Leisure Press, pp. 13-22.
- Novak, M 1976, *The joy of sports*, Basic Books New York.
- 里見元一郎 1965, 「ホイジンガの「文化史の課題」について」『文明』東海大 5。
- 1967, 「ホイジンガのルネサンス概念について」『東海史学』3。
- 1973, 「三つのホイジンガ論をめぐって」『歴史学研究』第398号。
- 1978, 「解説」ホイジンガ著・里見訳『文化史の課題』東海大学出版。
- 島田雄次郎 1940, 「ホイジンガに関する二、三の感想」『史学雑誌』第10号。
- 下村寅太郎 1972, 『精神史の森の中で』河出書房新社。
- 評論新社 1971, 『新評』5月特大号, 評論新社。
- 藺田碩也 1983, 『遊びの構造論』不昧堂出版。
- 多田道太郎 1971, 「ホイジンガからカイヨワへ」『京大人文学報』32。
- 高橋英夫 1977, 「“遊びと真面目”ホモ・ルーデンスをめぐって」『新体育』47-4。
- Tollebeek, Jo 1996, *De toga van Fruin. Denken over geschiedenis in Nederland sinds 1860*, Wereld bibliotheek.
- Valkenburg, C. T. van 1946, *J. Huizinga. Zijn leven en zijn persoonlijkheid*, Uitgeverij Pantheon N.V.
- Vollgraff, C. W. 1945, *Herdenking van Johan Huizinga*, Tjeenk Willink.
- Weintraub, Karl J. 1969, *Visions of culture*, Univ. of Chicago Press.
- 山田敏 1995, 「ヨハン・ホイジンガーの遊び概念批判」『遊び論研究』風間書房。
- 1996, 『遊び研究文献目録』風間書房。

(平成11年 9 月 8 日受理)